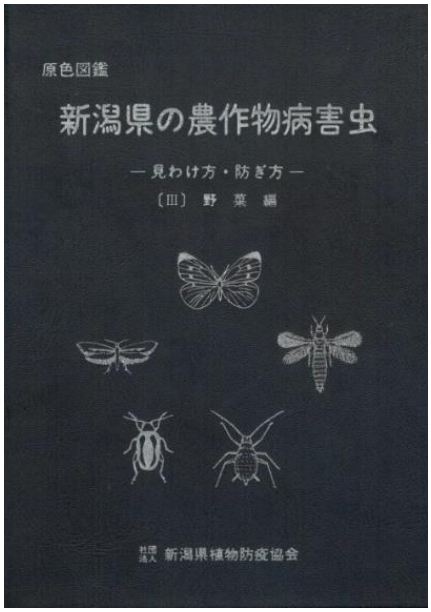


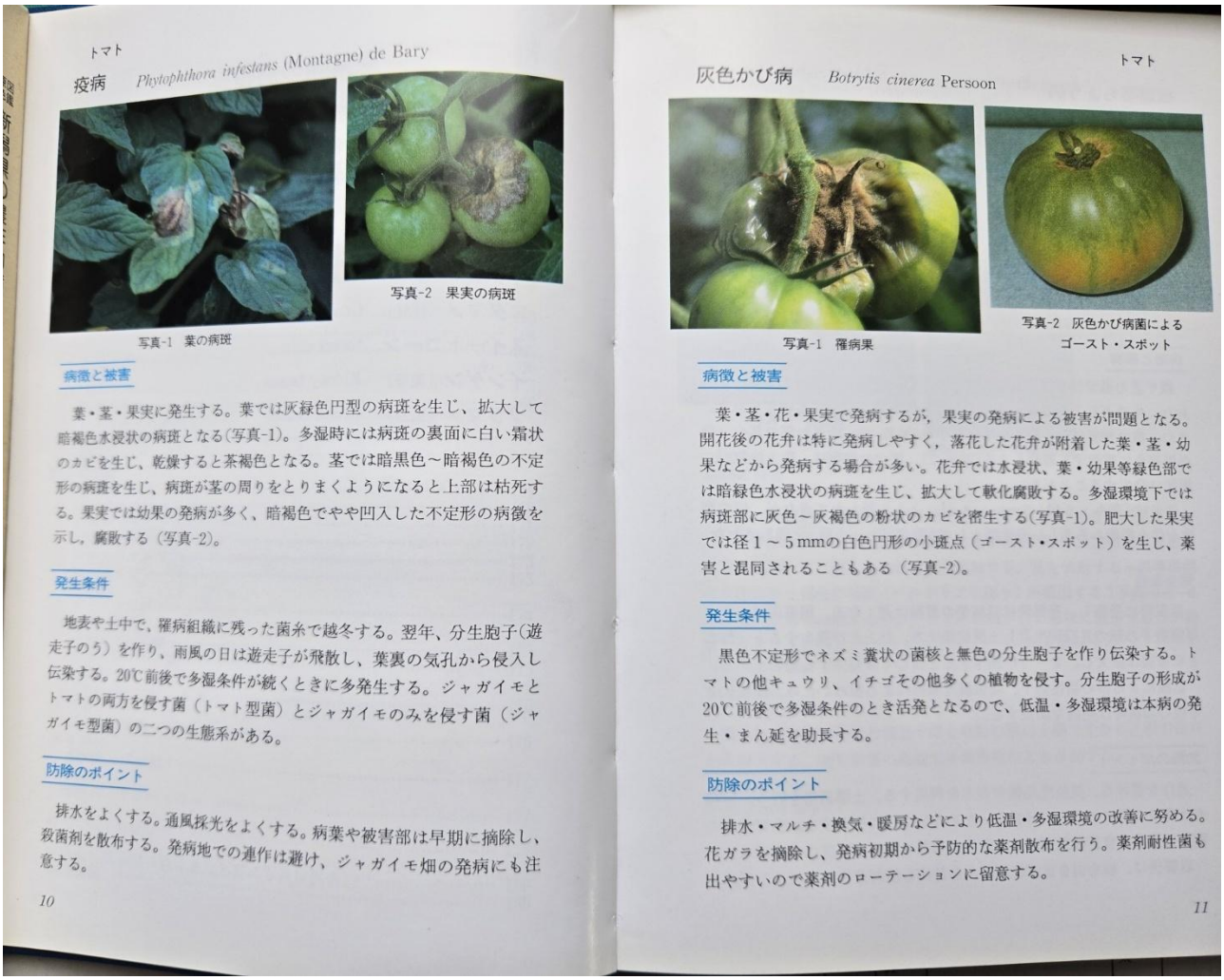
原色図鑑　新潟県の農作物病害虫

[Ⅲ]野菜編（改定増補版）

新潟県で発生する野菜の主な病害虫について「見分け方」「被害と発生予察」「防除のポイント」等が手早くわかる。

Ｂ６サイズ/186 ページ

内容例



トマト

疫病　*Phytophthora infestans* (Montagne) de Bary

写真-1　葉の病斑

写真-2　果実の病斑

病徴と被害

葉・茎・果実に発生する。葉では灰緑色円型の病斑を生じ、拡大して暗褐色水浸状の病斑となる(写真-1)。多湿時には病斑の裏面に白い霜状のカビを生じ、乾燥すると茶褐色となる。茎では暗黒色～暗褐色の不定形の病斑を生じ、病斑が茎の周りをとりまくようになると上部は枯死する。果実では幼果の発病が多く、暗褐色でやや凹入した不定形の病徴を示し、腐敗する（写真-2)。

発生条件

地表や土中で、罹病組織に残った菌糸で越冬する。翌年、分生胞子(遊走子のう）を作り、雨風の日は遊走子が飛散し、葉裏の気孔から侵入し伝染する。20℃前後で多湿条件が続くときに多発生する。ジャガイモとトマトの両方を侵す菌（トマト型菌）とジャガイモのみを侵す菌（ジャガイモ型菌）の二つの生態系がある。

防除のポイント

排水をよくする。通風採光をよくする。病葉や被害部は早期に摘除し、殺菌剤を散布する。発病地での連作は避け、ジャガイモ畑の発病にも注意する。

10

トマト

灰色かび病　*Botrytis cinerea* Persoon

写真-1　罹病果

写真-2　灰色かび病菌による
ゴースト・スポット

病徴と被害

葉・茎・花・果実で発病するが，果実の発病による被害が問題となる。開花後の花弁は特に発病しやすく，落花した花弁が附着した葉・茎・幼果などから発病する場合が多い。花弁では水浸状、葉・幼果等緑色部では暗緑色水浸状の病斑を生じ、拡大して軟化腐敗する。多湿環境下では病斑部に灰色～灰褐色の粉状のカビを密生する(写真-1)。肥大した果実では径１～５mmの白色円形の小斑点（ゴースト・スポット）を生じ、薬害と混同されることもある（写真-2)。

発生条件

黒色不定形でネズミ糞状の菌核と無色の分生胞子を作り伝染する。トマトの他キュウリ、イチゴその他多くの植物を侵す。分生胞子の形成が20℃前後で多湿条件のとき活発となるので、低温・多湿環境は本病の発生・まん延を助長する。

防除のポイント

排水・マルチ・換気・暖房などにより低温・多湿環境の改善に努める。花ガラを摘除し、発病初期から予防的な薬剤散布を行う。薬剤耐性菌も出やすいので薬剤のローテーションに留意する。

11